

勝川花菊の一生

長谷川時雨

青空文庫

勝川のおばさんという名がアンポンタンに記憶された。顔の印象は浅黒く、長かった。それが木魚の顔のおじいさんのたった一人の妹だときいても、別段心もひかれなかった。ただ平べったいチンチクリンのおじいさんに、長茄子なすのような妹があるのかなと思つた位だった。

しかし彼女は小意気だった、その時分の扮装おつくりが黒つぽかったので、背のたかい細ほそおもて面ひとの女を、感じから黒茄子にしてしまつたが、五十を越しても水極みずぎわだつていた。

幾年かすぎて、ふとその女ひとがはじめて来た日の言葉を思いだした。

「お滝さんにも久しぶりで逢あえて——」

自分の姪めいの家へきて、にもなんて変なことをいう——子供の心は単純で、かげりをもった言語ことばの深いあやを知らない。およそ、木魚のおじいさんの一族で、あんなに客として歓待されたものはないのにと、無視された母のためにアンポンタンは軽い義憤をもった。

だが、勝川のおばさんの生おいたち立たちをきくと無理はなかった。彼女としては、女中同様に追廻して使った姪に、さんの字をつけてよぶだけでさえ小癩こしやくにさわる——そうした気風の彼女だった。深川佐賀町の廻船問屋石川屋佐兵衛の妻女——なれのはてではあつたが、とにかく代言人長谷川氏の家を訪れてきたのだ。彼女の手

許の召使いだった姪は、彼女の添そばにいたからこそ売出しの新ニユーシ商ようばい 売いの人の後妻にもなれたのだ、という誇りをもつて——

勝川のおばさんという名と一所に出るのは佐兵衛さんと、も一人お角力すもうという人だった。いま思えば三角関係だったのでもあろう。佐兵衛さんは旦那だんなで、勝川お蝶は権妻ごんさい上り、関取××は出入りの角力、そして佐兵衛さんはさしもの大資産おおしんだいを摺すってしまつてもお蝶さんと離れず、角力は御贔負ごひいきさきがペシヤンコになつてしまつても捨てず、だんだん微禄びろくはしたが至極平和にくらした。海上暴風雨けのためにもは房州へはいるはずの、仙台米の積ふ船ねが、鰯いわしのとれるので名高い九十九里くじゅうくりの銚子ちょうしの浜へはいった。

江戸仙台藩の蔵屋敷からは中沢某なにがしという侍が銚子へ出張した。

中沢という侍は、幕臣湯川金左衛門邦純とならない前の、木魚の顔のおじいさんの姓である。

浜方は船が一艘そうは這入つても賑わう。まして仙台米をうんと積んだ金船が何艘となくはいつてきたのだ。もともと蔵屋敷の侍といえ、武士であつて半町人なかばのような、金づかいのきれいな物もの毎とに行きわたつた世馴なれた人が選まれ、金座、銀座、お蔵前な

どの大町人や諸役人と同様その時分の社交人である。十人衆、五人衆、旦那衆と尊称され、髪かみの結むすいかたは本田鬚ほんだまげ細身の腰こしのも

刀かたなは渋しぶづくりといつたふうで、遊蕩ゆうとうを外交と心得違こころあひいをしていた半官半商であつた。それらの侍たちや蔵前町人の豪奢ごうしゃを幾い

くたび
度か知っている浜のものは、鯨が上つたように悦んだ。

だが、ある夜よの中沢氏の旅館には、湿っぽい場面が行燈あんどんのか

げに示しだされた。それは木魚のおじいさんが幼少のころ出しゅっぱ

奔んした、母親がたずねて来たのだった。成長した子供の前へ、

恥もわすれて逢いに来た母親は、十二、三の女の子を連れていた。

「それは不義の子である、拙者に縁はない。」

大体の侍ならそういうであろうを、おろおろ泣いている母親と義妹とを見ると、捨てられた当時を思いだして、自分も泣いた子供心にかえつて咎とがめなかつた。

江戸入りは三人になったが、厳しい藩邸やしきの門はさすがにくぐらせられない。出入りの町家ちようかに預けておくうちに母親は鳶頭かしらのと

ころへ娘を連れて再縁した。そこに年頃のあるまり違わない娘があつたので、連子は妹とよばれ、おなじように稽古けいこごとも習わされるようになった。

この二人娘が姉は踊りで、妹は三味線で売り出して、諸大名のひいきも多くなつた。両親は左団扇うちわのホクホクだつたのである。

その妹娘の勝川花菊が、アンポンタンが長茄子と見た勝川のおばさんの前身だつたのだ。

人気渡世たいけの、盛りの花菊を、無理にも手生ていけにと所望し、金にあかして大家たいけの御内儀ごないぎとしたのが廻船問屋石川佐兵衛だつた。

中沢氏が湯川氏となつて、遠州お前崎から働きものの二女を連

れてくると、一躍して位置のかわってしまった金持の御内儀花菊さんは、働きものらしい娘を、てもと手許で召使つてやろうと言出した。湯川老人もその店で仕事をもつようになったので、彼にいわせればなんとも致しかたがなかつたのだ。私の母は彼女づきの小間使いに任命された。

大根おろしのように、身を粉にして動くことを、むだ無益も利益もなく、めちやめちやに好んだ壮健至極な娘でさえ、ばかばかしいと思つたほどこ酷き使つた。行ゆきどころ処のない身寄りだから逃げてゆかないという信状で、きようまん驕慢の頂上にいた花菊は無理我慢の出来るだけをした。無論他の者へも特別優しかつたわけではない。

彼女が芝居見物の日は、前の晩から家中の奥のものはてっしよう徹宵

する。暁あけがた方に髪を結つてお風呂にはいる。髪結は前夜から泊り
 きりで、二人の女中が後から燈をもっている。他の女中は蒔まき絵えの
 重箱へ詰めるあれこれの料理にてんてこ舞をするのだった。早く
 から船は来て（浅草ささ猿さる若町わかちやうにあつた三座の芝居へは多く屋根ふ
 船ねか、駕籠かごでいったものである）、炬燵こたつを入れ、縮ちりめん緬めんの大座布
 団を、御隠居さんの分、隠居さんの分、御新造さんの分と三枚運
 ぶ。御隠居さんと御ごの字のつくのが石川氏の母親のことで、御の
 字のつかない方が娘のために引きとられて楽隠居をしていた、
 湯川老人を捨てたお母さんであつた。二人とも向う河岸の、中洲
 よりの浜町に隠居しているのを誘つて乗せてゆくのだつた。この
 女ひとたちも花菊夫人におとらぬ氣き随まな生活であつたであらうが、頭

の方は坊主だったから芝居行きに泣き喚わめきはないから無事だが、母屋おもやの内儀の方はそうはゆかない。合せ鏡に気に入らない個所でも後の方に見出すと、すぐ破こわして結い直しである。それも髪結いさんが帰ったとなると、撫なでつけがうまいので髪のことだけは気にいっているお手許使いの姪めいのおたきがよばれるが、もともと機嫌を損じているのだから泣かされるまで幾度も結い直させられる。そうなると芝居なんぞは何時からでもよいとなる。お風呂ははいり直しである。昨夜ゆうべから寝ないものもキョトンとしてそのままですてつかねている。沖では船頭が寒がっている。二人の比丘びく尼に隠居のところからはせつせと使いがくる。

夏の日は大川の船の中で昼寝をするのがならわしだった。髪を

洗つてから、ちりめん浴衣で、棧橋につけさせてある屋根船へ乗る。横になりながら髪を煽あおがせるのだ。そうした大名にも出来ない気ままが、家のうちに充満して、彼女の笥くしげには何百両の鼈べつこう甲あが寝せられ、香料の麝じやこう香かうには金幾両が投じられるかわからなかつた。現今いまの金に算して幾両の金数きんすは安く見えはするが、百文あれば蕎麦そばが食えて洗湯ゆにはいれて吉原なへゆけたという。競くらべものでないほど今日より金の高かつた時代である。

とうとう三菱が起り、三井が根をなし、旧時代の廻かい米まい問屋石川屋に瓦解がかいの時ときが来た。

残りの有あり金がねで昔のゆめを追っているうちに、時世じせいはぐんぐんかわり、廻り燈籠どうろうのように世の中は走った。人間自然淘汰とうたで佐

兵衛さんも物故した。そのあとの挨拶に来たのが、私に印象させた長茄子のおばさんだったのだ。

ある時、急に社会が外面的に欧化心酔した。それは明治十八年頃のいわゆる鹿鳴館時代ろくめいかんで、晩年にはあんなゴチゴチの国粹論者、山県元帥やまがたげんすいでさえ徹宵ダンスをしたり、鎗踊りやりおどをしたという、酒池肉林しゅちにくりん、狂舞の時期があつた。吉原大籠おおまがきの遊女もボンネットをかぶり、十八世紀風のひだの多い洋服を着て椅子に凭りかかつて張店はりみせをしたのを、見に連れてゆかれたのを、私はかすかに覚えている。わが日本橋区の間屋町は、旧慣墨守きゅうかんぼくしゅ、因循姑息いんじゆんこそくの土地だけに二、三年後にジワジワと水の浸みるようにはいつて来た。でも私はびつくらした事がある。ある日、家

へ帰つてくると、知らない顔のお母さんがいる。それが毎日の通り、ちつともちがわれないお母さんらしい事をしてくれるが顔がどうも違うのだった。なぜなら母の顔は眉毛まゆげがなくなつて薄青く光つていた。齒は綺麗に真黒だった。それなのに、目の前に見る母はボヤボヤと生え揃わない眉毛があつて、齒が白くて氣味が悪かつた。彼女はまた何時になく機嫌よくニヤニヤするのでよけい氣味が悪かつた。

と、祖母が言った。

「おたき、眉毛が立つて狸たぬきのように見えてじじむさい、それだけは剃つたがよい。」

母は嬉しくなさそうな返事をしたが、私はやっぱりお母さんだ

つたのだと思った。急に黒襟えりのない着物を着たのと、髪の違つたのがなおさら人柄を違えて見せたのだつた。

私たちはその頃輸入されたばかりの毛糸で編んだ洋服を着せられ靴をはかせられた。二階に絨じゆうたん緞たんが敷かれ洋館になつた。お母さんが珍しく外出すると思つたら月げつきん琴を習いにゆくのだつた。譜本をだして父に説明していた、父は月琴をとつて器用に弾いた。子供のおり富とみもと本を習つた母よりも長ながうた唄をしこんでもらつてゐる私たちがすぐに覚えて、九連環なぞという小曲は、譜で弾けた。チンチリチンテン、チリリンチンテンと響くこの真まん丸い楽器がひどく面白かつたが、練習おそわりにゆくところが勝川のおばさんであろうとは随分長くしらなかつた。

私の家の外面的新時代風習はすぐ幕になってしまつて、前よりも一層反動化した。世間では清樂しんがくの流行はたいした勢いだつた、月明に月琴を鳴らして通る——後にはホウカイ屋というものも出来たが——真面目で、伊太利イタリーの月に流すヴィオリンか、あるいは当時ハイカラな夫人がマンドリンを抱えているような、異国情緒を味わおうとしたのだつた。

私の家で、急激な母の変わり方が、すぐまた前にもどつたのに面白ささいい些細な訳があつた。それは私たちをとても可愛がつた酒屋が、利久そばやの前側にあつて、隣家となりの家一軒買つて通りぬけの広い納屋にした空地があるので、いい私たちの遊び場だつた。二月の末になると赤い布をかけた白酒たるの樽が並べてあるのをかき廻して

も叱りもしなかった。その酒屋の一人娘がワーワー泣いて阿父おやじさんに叱られていたが、小さなアンポンタンの胸は、父娘おやこのあらゆる音を聞いてドキンとした。

「そんな事をいつたつてお父さん、長谷川さんの御新造ごしんぞさんだつて、束髪こまに結つて、細こまつかい珠たまのついた網をかけている。あんなやかましいおばあさんがいたつてさせるのに、家でさせてくれないなんて——嘘うそだというならいつてごらん本当ほんだから！ 買つとくれつたら買つとくれ、月琴も一緒に！」

酒屋の娘だからでもないだろうが、お榊ますさんというその独り娘は、島田をゴロゴロさせて泣き喚わめいた。

阿父おやじさんは、十とおにならない私には、新聞紙の一頁を二つに折つ

たほどの大きさの顔に見えた四角い人だった。胸毛も生えて、眉毛がねじれ上っていた。節瘤ふしこぶだった両手両脚を出して、角力すもうの廻しのような、さしつこでこしらえた前掛をかけて、白い眼だった。私は日やまとたけるのみこと本武尊くまその熊夷を思うとき、その酒屋の阿父を思出していたほどだった。塩鮭しやけは骨だけ別に焼いてかじった。干物は頭からみんな噛かじつてしまふし、いなごや蝸まいまい牛つぶろを食べるのを教えたのもこの人だ。それが怒鳴った。

「おれの家うちでは買わせねえ、商しょう業うへが違ちがうのをしらせねえか、どうしても頭に網をかぶせたきやあ、そこにある餅網もちあみでもかぶれ

—

泣いていた娘と、青ぶくれな、お玉じやくしののような顔の母親

とは、キョトンとして、天井から釣るさがっている、かき餅のはいつた餅網をながめたが、娘は一層狂暴に泣出した。母親は困つて小さな私に救いを求める笑えみを送つた。

私は駈かけてかえつて祖母おばあさんに訴えた。祖母さんはだまつて白い台紙に張りつけた、さんご珠じゆまがいの細かい珠たまのついた網を求めさせてくれた。お榊やさんは満足だったが、宅の母の方が、それきり束髪を止めさせられた。私の心の中で、母には似合わないと思つていたから、よしたので安心した。

勝川のおばさんが日本橋区へ進出して来たのはそれから二、三年たつてからだった。新道つづきの中なか一町をへだてた、私の通つ

た小学校のあつた町内の入口近かつた。一間半ばかりの出窓をもつた格子戸づくりの仕舞しもた家やで、流行はやりものを教えるには都合のよい見附きだつた。夏は窓に簾すだれをかけ、洋燈ランプをつけ、若い男女が集まつて月琴や八雲琴をならつていた。窓には人だかりがしていた。近くなつたので勝川おばさんは涼みながら来ては、蛇三味線じやみせんを入れるの、明笛みんてきも入れるのと話していた。彼女には、漸ようやく昔の賑やかな生活の色彩に、調子はかわつていても、帰つてゆくのが嬉しかつたのであろう。

だが、そのうちに日清国交破裂となつた。清樂なんぞやる奴やつは国賊だとなつた。勝川の窓は宵から締めないと石が降り込んだ。で、いつの間にか窓が閉つて家の中の人も逐ちくてん天してしまつた。

それから幾年、また勝川おばさんの所在不明。

おおもときよう

大本教が盛りだした時以上に天理教流行の時があつた。一

体下町で、いつも景氣のよい宗旨は日蓮宗だが、時々新らしい迷

信が捲まき起おこることがある。ある時、葛籠屋つづらやの店蔵に荒あら蕨むしろを敷

いた段をつくつて、段上に丸鏡まがきと榼さかきと燈明あかりをおき神繩しなへを張り、白

衣えの男おとこが無中むちゆうになつて怒鳴いかつていた。それを取りまいた一群いっぐんが、

トウカミエミカミ、トウカミエミカミというふうふうに喚わめいていた、

×××教けうといいうので堀越ほりこし三升さんしょうでさえ——九代目団十郎くわいだいめだんじゆうらう——権ごん

少すくなく都みやこの位ゐになつて信心しんじんしてしてるのだからたいしたものでさとい

う勢いきほいだつた。そのあとで狐狗狸こつくりさんが来た。これはむやみと景

氣きがよくて大衆たいしゆう的てき大人氣だいじんきで、いたるところ向むかう鉢巻はちまき三味線さんまいせん入りで、

車座になって、お飯櫃はちのふたをかぶせた三本足の竹の棒に神の来向を信じ、そら、足をあげた、ハイとおっしやつたとはしやいだ。そのあとが天理教だった。

天理教も大本教とおなじく、中山おみきさんという中国辺田舎のおばあさんが教主で、神田美土代町みとしろちように立派に殿堂をしやにかまえてしまった。これは信者の婦人が樂器なりもの入りで、白装束しろしょうぞく、緋ひの袴はかま、下げ髪で踊るのだった。なにしろ物見高い土地だから人だかりはすぐする。

勝川おばさんが隠れてから十年もたったある日、大丸の向側の家で天理教の踊りがあった。私の下の方の妹たちが通りかかりにのぞ覗いて見たら、広い店中祭壇にして、片側に樂人がならび、明みんて

笛きだの、和琴わごんだの交つて、その中には湯川一族の、鉦山から逃
出して帰つて来た連中たちの顔が見えた。もつとよく見ていると、
緋の袴で踊る少女が、あの戸板店といたみせのおせんべ屋夫婦の二女だつ
たので、母に聞えては悪いもののように、帰つてきてからそつと
私にだけきかせた。

「そうつといつて御覧なさい。今ならまだやつてる。」

だが、あたしには見にゆけなかつた。言わなくても母たちは、
勝川へ藤木の二女むすめがずつといつているといふ事はしつていたのだ
つた。

さすがの花菊も、もうたいへんすたれ果てた年となつていたで
あろうが、お角力すもうは影の形体かたちを離れぬように、いつもぴつたりと

附いていた。御直参おじきさんならずものたちは口が悪いから、宅などへくると、

「お角力はやつぱりいるさ。」
と

「あの角力も妙な男だよ。立派なずうたい体をして、なんでまあああしているのかねえ。まるで権助同様なあつかいで、あのおばさんのことだから、ポンポン言つてらあね。」

「商業でもしてるのかね。」

「どうしまして、台所やせんたくがなかなか忙しいのに、あれで道具運びの荷ごしらえに手がかかりますさ、力があるからお誂あつらえむきだが。」

「あの男だつて相当な番附位置とこころにまではゆけたらうにな。」

「色の白い、体の綺麗な角力取りだったが、何も石川屋が没落したからつて、自分も角力を没落しなくつたつてよさそうなもんだつたのに。」

だが、勝川お蝶さんの一生には、なくてならない人はこのお角力だつたのだ。傍はたのものは道具はこびにお誂はたえむきだといったが、お角力にはピツタリはまった役目があつたのだ。彼は勇敢に若き日の一生をかけて、その力を、自分の愛するもののためにとつておいたのだともいえる。そしてその最後の日が来た。

天理教の踊りがピツタリ逼ひっそく塞そくしてしまつたと、勝川おばさんの逼塞も本ものになつて、手も足も出なくなつてしまつた。むかし、

大川の河風にふかれて船の上で昼寝をした夢をしのびながら、陋^ろ居^{うきよ}に、お角力の膝^{ひざ}を枕^{まくら}にして、やさしく撫^なでられながら彼女の生涯は終わった。

あたしの母も、母の姉のお房さんも行った。夜更けて帰って来て、なにしろ家がせまいから、明朝^{あした}また早くゆくといつてくつろいでいた。その翌日いつたらもう死者は家にいなかった。落魄^{らくはく}御直参連一党がつらなつて帰って来てつぶやいた。

「今度こそ角力が入用な人間だったってことがわかったよ、おばさんの役にたった一番目で、それがおしまいだ。」

「だが秀逸だ、あの男の。」

父が出てゆくとみんな頭を揃えてさげて、

「ありがとうございます。取りかたづけはすみしました、角力がひとりで、しよつてしまいました。」

「そうか、あの男でも、それだけの準備はしてあつたと見えるね。」

「ところが、それがね、しよつてしまつたつて、一さいの事ではないのですよ。滑稽こっけいなことにはお婆さんの棺桶かんおけをしよつてしまつたんでさあね。」

「人夫にしよわせるのは嫌だともいうんでしようね、お角力さんの心意気だあね。」

と母が言った。皆は笑つた。

「とにかく、今夜はおれひとりでお通夜をします。長く世話にな

つたからというから、家はせまいし、もつとも尤だと思つてまかせたら、
奴さんやつこその間に、すたこら、自分で始末して、棺に入れてしよつ
て、火葬揚やきばへもつてつてしまつたんで——おばさん死ぬまで、重
宝な権助をつかまえといたまんだ。」

だが、私の目には笑えない、生涯のそりとした、そのくせ誠実
な大男が、愛した女の亡骸なきがらを入れた桶をしよつて、尻しりはしより
で、暗い門から露路裏を出てゆく後姿をかなしく思いうかべられ
た。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

2004年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

勝川花菊の一生

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>